

DSM-5® 診断面接ポケットマニュアル

Abraham M. Nussbaum ● 原著

高橋三郎 ● 監訳

染矢俊幸, 北村秀明 ● 訳

徳島大大学院教授・精神医学 大森哲郎

「私と同じような人っているのでしょうか」と心配そうに質問されることがよくある。患者からみれば、自分1人の固有の体験に苦しんでいるのだ。「同じようなことで困っている人はいますよ」と答えると、ほっとしたような表情を浮かべられることが多い。そして「そういう人たちはどうしているのでしょうか」という問いに、「はい、それはですね」と、やりとりが続いていく。こうして得体の知れない体験に症状ないし病名という既知の名称が与えられ、そこから診療が進んでゆく。

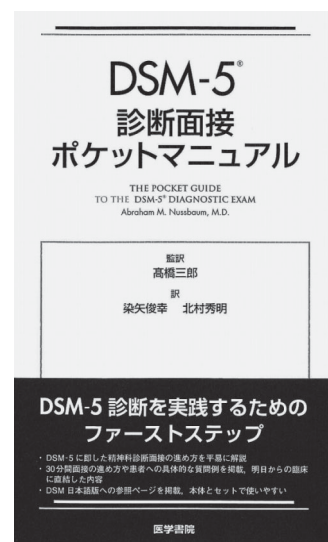
このとき私たちの念頭にある症状や病名の基準を提供しているのがDSMである。私たちは2013年に改訂されたその最新版になじんでおく必要がある。DSM-5に新たに導入しない改訂された疾患概念のいくつかは、導入当初は知る人も少なかったパニック障害（DSM-III, 1980年）や双極Ⅱ型障害（DSM-IV, 1994年）が今では臨床家の常識となったように、今後の臨床に不可欠となっていくだろう。

本書『DSM-5® 診断面接ポケットマニュアル』は、その書名からDSM-5を安直に使用するための手引きと誤解される恐れがあるが、実際はそうではなくて、DSM-5を本

格的に理解し活用するための内容の濃い書物である。巻頭の第1章には、精神疾患を診る者は、「固有の視点をもたねばならないが、それが必須であるにもかかわらず、その視点は必然的に不完全となることを理解すべきである」とある。なかなか深淵な名言である。もちろんDSMとして例外ではない。

第2章では、「人々は、自分の精神的苦痛が診断基準に該当するか否かを確認するために、あなたの援助を求めているのではない。診断面接の核となるものは、精神症状の評価ではなく治療同盟の形成であり、それはあなたの患者をよりよく知ることと関係する」と述べられている。適切な指摘だ。続く第3章で、治療同盟形成とDSM診断を両立させるための原著者創出のユニークな30分間診断面接を紹介したあと、第4章ではDSM-5が一步足を踏み入れた次元（ディメンション）的見方を紹介し、第5章ではDSM-5の重要改訂項目を、うつ病、統合失調症、アルコール使用障害、自己愛性パーソナリティ障害について症例を示しながらわかりやすく解説している。

第6章は本書の中核部分であり、問診の質問例を具体的に示しながら主要疾患について診断面接の実際を



提示している。第7～第13章までは順に、「診断早見表」「鑑別診断のための段階的解決法」「用語集」「米国精神医学・神経学認定委員会の臨床技能評価」「評価尺度の抜粋」「パーソナリティ障害群の次元診断」「代替診断システムと評価尺度」に関する簡潔な紹介である。代替診断システムとしては、精神分析団体連合の精神力動的診断マニュアル、精神科医 Paul McHugh の群分類、米国国立精神衛生研究所の調査領域基準などの存在が目配りよく手短かに紹介されている。

診断面接のあり方に関する鋭い考察、DSM-5の改訂点や特徴や位置づけの平易な解説、診察場面での実用的手引き、といった異なった視点からの論述が各章に按配されて、DSM-5を多面的に理解するための有用な一書となっている。

B6変型・頁304 2015年

定価：本体4,000円＋税

[ISBN978-4-260-02049-7]

医学書院刊